

## 要旨

### 伝統的陶磁器業の地域的存立基盤に関する地理学的研究

初澤敏生

本研究は存続の危機にある伝統産業の地域的存立基盤を、伝統産業の中で比較的強固な基盤を有している陶磁器業を事例として明らかにすることを目的としている。本研究ではこれを解明するにあたり、①技術伝承・人材育成、②原料等の確保、③市場の確保、④まちづくりによる観光客の誘致、の各点から分析を加えた。ただし、これらの課題は相互に結びつきあっているために、まず陶磁器産地をその特徴ごとに類型化した上で、それぞれの中から事例産地を取り上げてその生産構造を分析、それを再整理して上記の課題を明らかにするという方法をとった。

陶磁器産地の類型化にあたっては、伝統産業の存立基盤として最も重要である「伝統性」を重視し、その強弱を基準として備前産地、益子産地、笠間産地、会津本郷産地の4を事例として取り上げた。

技術伝承・人材育成に関しては、歴史的伝統性を重視する産地ほど強固なシステムが構築されている。逆に伝統性が重視されていない産地ほど産地の性格は曖昧なものとなり、人材育成システムも弱い。基盤の弱い産地では公設試験場がこれを補い、産地を支える機能を果たしている。また、公設試験場は新製品開発支援などでも重要な役割を果たしている。しかし、そのような支援を受けることができるのは一部の規模の大きな産地に限られており、その他の産地は人材育成を他産地に依存せざるを得ない状態となっている。

原料等の確保も伝統産地にとって重要な課題であるが、優良な原料の枯渇がすすむ一方、宅配便の普及などによって他産地の原料を入手することが容易になった。その結果、現在では一部の特徴ある伝統製品を除けば地元産の原料を使用する比率は大きく減少し、原料の存在は産地の地域的存立基盤としてはあまり重要な役割を果たしていない。

市場の確保に関しては、製品開発とも密接に結びついている。作家による作品の制作を中心とする産地では各作家が直接顧客と結びつき、各作家の販売体制の集積の上に産地が形成されている。これに対し、作品以外の製品も販売している産地では大量販売も可能とするような流通ルートの構築が求められている。しかし、益子産地が共販センターの建設など独自の活動を進めたのに比べて、他の伝統性の弱い産地では十分な流通ルートを確認できていない。この点に関しても、伝統性の弱い産地ほど地域的存立基盤は弱体である。

まちづくり事業は行政による産地支援の事業として非常に効果的である。特に益子産地では大きな成果を上げている。しかし、まちづくりを進めるためには行政による施設整備だけでは不十分で、地域住民全体を巻き込んで行わなければ効果は上げられず、地域住民が地域の伝統産業の価値とその振興の必要性を十分に認識することが不可欠である。

伝統的陶磁器産地の地域的存立基盤は歴史的伝統性に基づく産地ほど強固であり、伝統性の弱い産地ほど弱体である。それを補強し、産地の存立基盤を補強しているのが公設試験場による各種支援事業や行政によるまちづくり事業である。これらを効果的に実施することができれば産地の振興に大きな成果を上げることが可能である。伝統産地の振興には、このような産地特性を把握した上で、その地域的存立基盤を強化するのに適した事業を実施することが不可欠である。